

# かたりべ104

豊島区立郷土資料館だより

80年前の高田町の写真帖を発見！  
1月21日(土)からの収蔵資料展で展示中



改修前の鶴巻（弦巻）川 下流域の宝城寺と清立院を望む



写真右の大鳥神社の脇を流れる鶴巻（弦巻）川が、下水道工事にともなう暗渠となり、「鶴巻道路」が完成した。一段高くなった道路が王子電車の線路を横切る。神社境内には暗渠記念碑が建つ。

今年、北豊島郡の旧四町が統合し、豊島区が誕生して八〇年を迎えます（一〇月一日区制施行）。その一つ、高田町（海老澤了之介町長）が「高田町解体を後世に記念すべく」、昭和七（一九三二）年九月に発行した写真帖が、昨年十一月、西池袋の鏑木孝久氏より寄贈されました。

写真帖は、縦二八・二cm、横三六・三cmで、二四枚の台紙に計八〇枚のモノクロ写真が貼られています。撮影は小石川区豊川町の南谷写真館で、表紙に「旧高田町役場時代」の墨書があり、非売品であることから、部数限定で作成され、関係者に配布されたものと思われます。

寄贈者の祖父・鏑木久五郎氏は、大正一〇（一九二二）年から昭和四年まで町会議員を二期務め、さらに町解散直

前まで警備委員を務め、自治功労者として写真が掲載されていることから、この写真帖が鏑木家に贈呈されたものと思われます。その「編纂後記」には、「解体当時の関係人物、教育、交通、風景は勿論、上下水道、土木、警備其の他諸建造物に対する今昔史跡をも加味」したとあるように、町長・町会議員・団体等の人物写真が二五枚、鶴巻川・下水道工事と神田川改修工事が二〇枚、小学校・教育会関係が八枚、町役場・施設関係、高田町消防組、寺社が各六枚など、実に多様な内容となっています。これらの鮮明な写真を通して高田町の往時の姿が蘇ってくると同時に、当時の町の重点施策が下水道事業と防火機関（消防組、警備委員）の強化であったこともわかり、貴重な地域資料といえます。

（横山）

# 五〇年前、一五〇年前の日常生活にタイムスリップ！

冬の収蔵資料展開催中（～三月三十一日）です

## ■「新着資料紹介」コーナー

郷土資料館は、一九八四（昭和五九年）に開館して以来、区民の皆さまをはじめ、多くの方々からさまざまな資料をご寄贈いただき、それらは当館主催の展示会などの場で活用させていただいております。

このコーナーでは、最近一～二年の間にご寄贈いただいた新着資料を中心に紹介いたします。戦前期の「写真アルバム」、今では懐かしい「真空管ラジオ」や「足踏



壁面には1960年代以降の豊島区内を走る都電の写真を展示しました

みシン）、「黒電話」、また東京オリンピック

「記念メダル」、「記念都電乗車券」など多彩な内容となっています。

## ■「むかしのくらし」コーナー

区内の公立小学校三年生の多くは、毎年この時期に、社会科の授業の一環で「くらしのうつりかわり」について学習します。そして、小学校のうち何校かは、実際に資料を見たり、触ったりするため郷土資料館を訪れます。



昔なつかしいちゃぶ台もあります

このコーナーでは、展示室の一角に二

畳分の畳を敷き、その上に「卓袱台」、

「火鉢」、「白黒テレビ」、「真空管ラジオ」を配置して、昭和三〇～四〇年代の一般

家庭の茶の間を再現。また、さまざまな湯たんぽ、「餅つき用の白」と「杵」、

その使い方がわかる写真などを展示しました。教科書に掲載されている写真だけではなかなかイメージできないかつての生活道具類も、実物を見ることで使い方もよくわかる、と毎年好評のコーナーです。

## ■「江戸時代のあかり」コーナー

夕暮れ時の家に次々とともる「あかり」から、夕食作りの慌ただしさや、家族の団らんをイメージする方も少なくないと思います。街全体に広がる家々の「あかり」は、今も昔も暮らしの温もりを象徴するものと言えるでしょう。ところが、現在あたり前のように使用している電灯が家庭に浸透したのは、実はここ一〇〇年程度に過ぎず、それまでの「あかり」の主役は「火」であり、炎の明るさでした。

江戸時代の都市生活では、囲炉裏で焚く火のあかりにかわって、あかり専用の

道具（＝灯火具）が発達しました。そして生活様式に合わせて多様な灯火具が作られたのです。



“電気のある生活の快適さ”がよくわかります

このコーナーでは、豊島区内の遺跡から出土した灯火具から、江戸時代の豊島区域に生きた人たちの生活を考えたいきます。油のあかり、蝋燭のあかりそれぞれに特徴があり、道具類にも様々な工夫が見られます。また、電球の明るさと灯火の明るさを比較した映像から、江戸時代の夜のうす暗さ、そして今日の夜の明るさ（快適さ）を想像して下さい。

【このコーナーは、教育委員会教育総務課文化財係、およびNPO法人としま遺跡調査会の協力を得ました。】（秋山）

# 厄除けの呪符かわらけ／まじないの考古学

## 豊島の遺跡 第八回

二〇一一年は、未曾有の大災害だった東日本大震災を始め、いくつもの悲しくも厳しいできごとが続きました。二〇一二年こそは良き年であるよう、多くの皆さんが願っておられると思います。願いごとをするのは江戸時代と同じこと。一寸した身近なことでも、神仏を祈り、願をかけ、心の安寧を求めています。

※ ※

広大な津藩藤堂家染井屋敷（下屋敷・抱屋敷）の一角を占める駒込四丁目の発掘調査で、直径十七cm、深さ三cm程の素焼きの大皿（かわらけ）二枚が上下に重ねられて「合わせ口」の形で発見されました。これは、江戸時代の精神生活の一端を知ることができる、今まで全く知られていなかったものです（以下図参照）。二枚の皿の内側は、全面が梵字や経文などの墨書で埋められていました。明らかに宗教的・呪術的な匂いの強い遺物です。それにしても、いつ誰がどのような願いをこめて埋めたのでしょうか。

上・下二枚の皿に共通する文字に「辛未年女三十二」があります。おそらくこれが「呪符かわらけ」を埋めた願主

で、辛未の年に三十二歳の女性が埋めたと推測できます。埋められた時期は、「かわらけ」の作られた年代等を含めて考えると、江戸時代の辛未年の中で、宝暦元年（一七五二）が最もふさわしいこととなります。また、出土した場所が藤堂家染井屋敷の御殿空間であり、埋めた女性は藩主に関わりを持つような身分の高い人だったと思われる。

では、何のために埋めたのでしょうか。下皿の下半分に「呪祖諸毒薬 所欲害身者 念彼観音力 還着於本人」と折り返す形で書かれています。これは、おおむね「呪祖や毒薬に害されないよう観音菩薩が護ってくれる」という意味の観音経の一節ですが、この場合は少し深い所でその意図を汲み取る必要があるようです。女性の三十三歳は大厄とされ、凶事や災難にあら確率が極めて高いので十分な警戒が必要といわれています。そして、江戸時代には大厄の年の前年に様々な形で厄除けを神仏に祈ったようですが、「かわらけ」に書かれていた三十二歳が、まさに女性のその年齢にあてはまります。このことから、発見された「呪符かわらけ」

は、大厄の年を無事に乗り越えられることを祈念して、身近な場所に埋めたものと考えることができそうです。

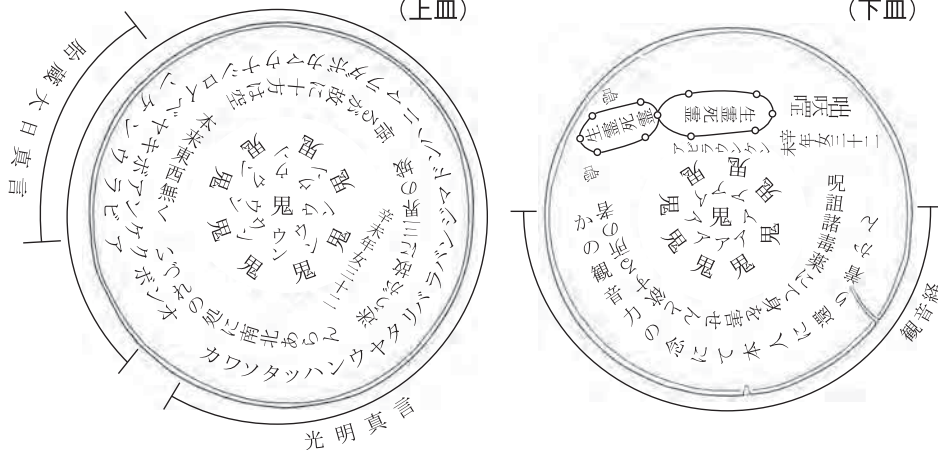
以上をまとめると、藤堂家染井屋敷の

御殿空間に生活する三十二歳になる女性が、自身が大厄を迎える前年に厄除けの願いを込めて埋めたということになります。もちろんこれは、推定の域を出るものではありません。「かたりべ」読者の皆さんも、この「呪符かわらけ」を巡る謎解きに挑戦してみませんか？（橋口）



(上皿)

(下皿)



出土した呪符かわらけ／図中のカタカナは梵字を読みで示したものです。  
（豊島区遺跡調査会『染井XI』2006より引用）

## 連載 一点の資料から 《22》

# 神田川の写真

### 豊島区を流れる川

豊島区には南池袋から雑司が谷の地下を流れる鶴巻(弦巻)川、現千川通りの地下には千川上水、谷端川南・北緑道の地下には谷端川が流れています。他に江戸時代の村絵図を見ると、今日では忘れられた川が豊島区区域を流れていたことがわかります。

豊島区立郷土資料館では一九九一年に特別展「千川上水展―うつりゆく流域のくらしと景観―」で千川上水を取り上げました。また豊島区を流れる川などについて調査した報告書なども刊行しています。その一つ、『旧谷端川の橋の跡を探る』は豊島区立郷土資料館友の会が中心となって刊行しました。

では今日、豊島区内で流れている川を目で見ることにはできないのでしょうか。実は豊島区内には高田一・二・三丁目をかすめるように新宿区との区境を神田川が流れています。この川は暗渠あんきょになっておらず、今日でも水が流れる姿を見ることがができます。

### 豊島区の神田川

東京都三鷹市の井の頭恩賜公園内井の頭池を源流とする神田川はJR高田馬場駅あたりから豊島区に入り新江戸川公園付近を出て両国で隅田川と合流しています。

さてここで紹介する写真は昭和初期に撮影された神田川です。兩岸に染色業者の干場ほしばを確認できます。染色には使用した糊を洗い流すなど多くの水を使用するとともに、水質が影響されることから業者にとって川はとても重要でした。

大正十二年に関東を襲った関東大震災後には、被災した染色業者などが浅草・神田方面から移転してきます。他に、東京中心部の人口増加に伴い、手狭になった浅草・神田から、東京の郊外ではあります、東京中心部とのアクセスがよい豊島区域に染色業者が集中しました。今日の神田川と見くらべると発見があるかもしれません。

### 染色業者は今どこに？

昭和三十三年三月三十一日に「公共用水域の水質の保全に関する法律」と「旧工場排水等の規制に関する法律」が施行されます。この法律は後に水質汚濁防止法が施行されることで廃止されます。

これらの法律により、染物に使用する

染料を神田川で洗い流していた染色業者は染料に化学薬品が使用されていることや川の水がいろいろな色で染まることから、布に付着した糊などを神田川に洗い流すなどができなくなりました。また戦後、都市部への流入人口の増加に伴い土地の価格が上昇した結果、広い敷地を必要とした大半の業者はより安く広い土地を求めて足立区などに移転しましたが、神田川及び妙正寺川流域で今も経営している業者は数社あり、地下水をくみ上げ水洗いに使用しています。

川沿いに染色業者があつたことから友禅などの絵師がその周辺に住んで活躍しました。豊島区には今も絵師が活躍しています。今日では遠くなったように思える江戸の伝統が実は身近なところで今も脈々と受け継がれています。(岡本)



昭和初期の神田川

## 編集後記

このところ、本格的な寒さが身に沁みる冬らしい気候が続いておりますが、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。一月二十日はついに今冬の初雪ということで、空気の冷たさにも一層の厳しさを感じています。

その中で資料館は、展示室を閉鎖して「冬の収蔵資料展」開催の準備に追われていましたが、ようやく一段落。無事に二十一日の開館に間に合わせることができました。今回の収蔵資料展の内容については、一二頁に紹介しております。御一読されて、是非皆さまお誘いあわせのうえ資料館まで足をお運びいただければと思っております。(は)

かたりべ  
No.104

2012年1月31日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>